別紙１

平成２６年度　学内教育ＧＰプログラム事業経費計画書（継続型）

学　　長　殿

申請者（プログラム代表者名）
氏　名　　鷹野　景子

（部局長等の承認）
私は下記の申請について了承します
職名　　大学院人間文化創成科学研究科長
氏名　　石口　彰

職名　　理学専攻長
氏名　　小林　功佳

事　業　名　称	（理系学生海外派遣事業） 校風をつなぐ女性科学者の育成　－ 第二のマリー・キュリーをめざせ －
取組代表者名 担当者名	大学院人間文化創成科学研究科　教授　鷹野景子 大学院人間文化創成科学研究科　教授　小口正人 大学院人間文化創成科学研究科　教授　小林一郎 大学院人間文化創成科学研究科　教授　伊藤貴之 大学院人間文化創成科学研究科　教授　浜谷　望 大学院人間文化創成科学研究科　教授　曹　基哲 大学院人間文化創成科学研究科　教授　近藤敏啓 大学院人間文化創成科学研究科　教授　小川温子
事　業　内　容	平成２０−２４年度に実施した日本学術振興会若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（若手 ITP）事業の継続事業である。 若手 ITP では、博士前期課程学生を海外協定校に派遣して１セメスターの講義履修と単位認定を行う「研修留学」と大学院学生（前期・後期課程）を研究のために派遣する「研究留学」を実施した。 継続事業としては、「研修留学」のみ実施する。すでに実績のある、ドイツの協定校バーギシェ・ブッパタール大学への派遣学生を公募により募集する。面接審査によって選考し、科学英語、英語プレゼンテーション、異文化理解などの事前研修を施した上で、派遣する。帰国後に、履修した科目の単位を認定する。また、次年度に向けての広報活動を兼ねた派遣報告会を実施する。 なお、学生派遣の経費は、JASSO の派遣事業に申請中である。 本事業は、グローバルに活躍する理系女性リーダーの育成に資するものである。過去５年間に、研修留学 59 名、研究留学 19 名を派遣してきた。研修留学経験者の多くが、留学経験を評価されて就職し、キャリアパスを拡げている。研究留学経験者の中から、ロレアル若手奨励賞受賞者２名を輩出し、研究教育機関でのポスドクや助教として研究者の道を歩みだしている例が多数ある。 ５年間の事業を経て、理学専攻の大学院生が短期研究留学を希望する事例が増えており、国際的な場所に身に置こうとする大学院生が着実に増加している。学生の積極的な姿勢に対して、研究費からの経済的支援を含めて教員も機

	会を与えることに熱意をもって対応している。JASSOへの申請をしつつ学生の海外派遣事業を推進することは、国際的に活躍する女性研究者・女性リーダーの育成に資すると共に、グローバル人材育成推進事業において定めている学生海外派遣の数値目標の達成に貢献する。 　支援期間終了後は、派遣事務をスリム化して、理学専攻内で事業を継続する。学内教育ＧＰプログラム（継続型）実施中に、そのノウハウを検討しておく。
積　算　内　訳	・人件費（AA） 　給与　@1,200円ｘ８ｈ（１週間)ｘ４回（１ヶ月）ｘ 12ヶ月 ＝ 460,800円 　通勤手当　@4,000円 ｘ８月＝32,000円 ・物件費（消耗品）　7,200円

別紙２

平成２５年度　学内教育ＧＰプログラム事業（継続型）
現在の進捗状況と今後の事業計画書

取組代表者　　鷹野　景子

事　業　名　称	（理系学生海外派遣事業） 校風をつなぐ女性科学者の育成　－ 第二のマリー・キュリーをめざせ －
現在の進捗状況	＊　２５年度に助成を受けている課題については、事業計画に即して成果を詳細かつ客観的に記載して下さい。 平成 25 年度は、旧年度中の国際・研究機構および国際交流チームとの合意に従って、グローバル人材育成推進センターのグローバルリーダー育成担当メンバーが、学生の派遣プログラムの一つとして、若手 ITP 後継事業である本事業の運営を担当している。しかしながら、センター業務の精査の結果、平成 26 年度以降は、本事業をセンターで担当することが困難であるとの判断がなされた。これを受けて、平成２６年度について、学内教育 GP プログラム（継続型）に申請することとした。 平成２５年度の派遣事業としては、公募により、研修留学派遣の募集を行い、理学専攻学生５名を採択して、１０月に、ドイツのバーギシェ・ブッパタール大学に派遣した。３月の公募開始時点では、JASSO の派遣事業が不採択（不採択課題の中で、評価 A）であったことから、学生の応募が例年に比べて少なかった。結果的には、JASSO の強化枠での追加申請（６月）が採択されて（９月）、派遣生は、５ヶ月分の滞在費の支援を受けることができた。現在、現地で元気に勉学に励んでいる。 教員１名が１１月に現地を訪問し、学生との個人面談を行って、勉学と生活の状況を確認・把握するとともに、受け入れ機関の担当教職員と情報共有を行った。２０１４年２月上旬にも別の教員が訪問し、研修留学の成果を確認するための評価会を開催し、英語での研究発表（プレゼンテーション）を聞くことで、現地教員と共に学生の成長を評価する予定である。学生たちは２月上旬に定期試験を受け、合格した科目に対してのお茶大での単位認定を帰国後に行う。 バーギシェ・ブッパタール大学からの学生受け入れとしては、過去に３名の大学院生の半年間の受け入れと、１名の大学院生の２ヶ月の受け入れ、英語に寄るサマープログラムに５名の学生の受け入れの実績がある。さらに、平成２６年度に、２名の大学院生を受け入れを予定している。
今後の事業計画	ドイツの協定校（バーギシェ・ブッパタール大学）との間で過去６年間に構築した信頼関係を活かして、今後も理系の博士前期課程学生を研修留学に派遣する。取得した単位は、帰国後に単位認定する。協定校からも、学部生、大学院生を問わず、英語によるサマープログラムや半年間あるいは１年間の交換留学生として積極的に受け入れることで、双方向の学生交流を促進する。

※　　この様式は適宜広げて（本用紙を含め２枚以内）記入してください